

上海小雑記

弁護士 服部 由美

1. 平成25年(2013年)8月19日から23日まで、愛知県弁護士会の国際委員会の企画で、短期研修として、上海を訪れ、上海兆辰匯亜律師事務所(Shanghai Zhaochen Law Firm)で、1週間、お世話になりました。
2. 上海兆辰匯亜律師事務所での短期研修
 - (1) 上海兆辰匯亜律師事務所は、主に日系企業を顧客とする法律事務所、所属する弁護士等は、約20名で、うち、パートナーは5名です。会計師事務所も併設されています。

同事務所パートナー弁護士の賈曉海(Xiaohai JIA)先生は、中国上海外国語大学英語フランス語学科卒業後、東京大学大学院法学政治学研究科国際経済法専攻修士課程修了(法学修士号取得)されているので、日本語の他、英語、フランス語も堪能で、近時、フランス系企業の顧客開拓にも力を入れておられるようです。
 - (2) 上海兆辰匯亜律師事務所では、主に、賈曉海先生が手がけられている日系企業の案件を、勉強させていただきました。

詳細は守秘義務にかかり申せませんが、合弁契約、独資の設立等、前向きなものから、国有企業に対する債権の回収、中国からの撤退等、後ろ向きなものまでありました。また、日系企業が中国に進出する際に多く直面する知財事件(商標法、不正競争防止法等)あり、刑事事件ありと、短い期間ではありましたが、極めて多岐に亘る業務に触れることができました。

日系企業を主な顧客とする事務所だけあり、その提供するリーガルサービスは、上質で、肌理細やかであるとの印象を受けました。

ただ一つ残念だったことは、裁判に随行することは難しいということで、労働仲裁への随行を希望していたのが、生憎、流れてしまったことです。
 - (3) 賈曉海先生をはじめ、上海兆辰匯亜律師事務所の皆様には、快く弊職を受け入れていただいた上、色々ご指導いただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

短い期間ではありましたが、現地法律事務所ではなければ得られない貴重な経験をすることができましたので、今後の弊事務所業務に活かすべく、精進していきたいと思っております。

3. 上海についての感想

- (1) 上海は、今回で4回目の訪問でした。
- (2) 最初に上海を訪問したのは、実に、約四半世紀前の1991年7月です。
当時は、未だ、外貨兌換券やそれを使える友誼商店があった頃です。
レストランに入っても、お店に行っても、従業員の態度は基本的に「売ってやる」というものでしたが、北京に比べれば、上海は、格段に対応が良かった印象です。

この時の中国旅行は、ハイヤーとガイドを雇って、希望の訪問先を手配できるというパック商品を利用したものでした。小娘2人で、贅沢をして、申し訳ないなと思いつつ、当時の勤務先の隣の部署が中国室だったので、そこで仕入れた情報に基づき、あちらこちらをみてまわりました。

当時、外灘（The Bund）の対岸、浦東地区には、現在のような高層ビル群はありませんでした。



基本的に現在も変わらぬ外灘。
三角屋根が、和平飯店の北楼。



ガーデnbrリッジ（外白渡橋）。
橋に向かって右側が旧日本人街。



黄浦江。

盛夏だったのですが、冷房が入っているお店は少なく、緑波廊で飲茶を楽しんだ際、2階の一部に冷房が入っていて、支配層らしき中国人家族が子供の誕生日会を開いていたのを強烈に覚えています。恥ずかしながら、ここで、初めて、小籠包をいただきました。

夜に訪れた和平飯店のジャズバンドには、何故か哀愁を感じました。



1Fのみならず、2Fでも、多くの窓は全開…



バンドマンはにこりともせず入ってきて演奏

- (3) 2回目に上海を訪れたのは、2005年11月。空港から市内へ向かう途上、大規模な建築工事が多数みられ、心底、驚いたものです。

兄が上海に赴任しており、季節柄、上海蟹を堪能しました。



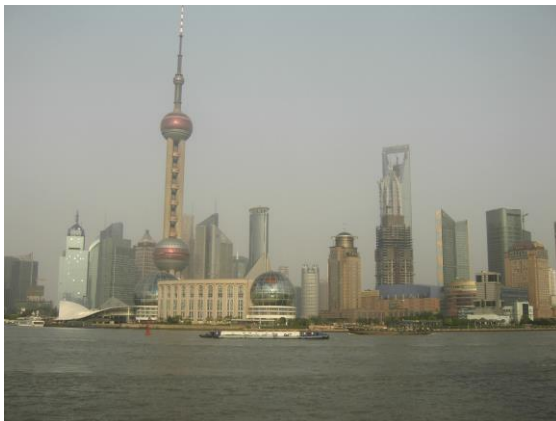
緑波廊で花茶をいただきましたが、お店の雰囲気はだいぶ変わっていました。

- (4) 3回目の上海訪問は、2008年4月。愛知県弁護士会国際委員会の上海視察旅行によるものです。

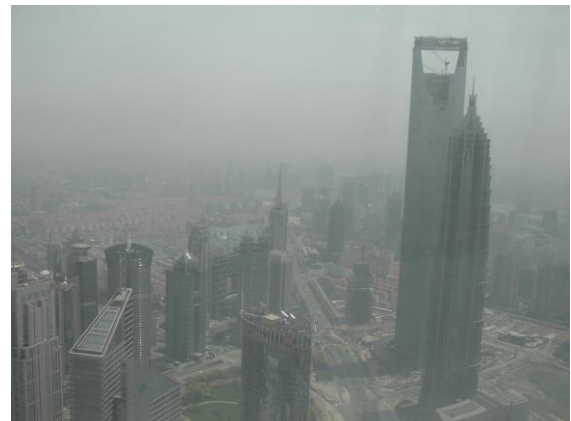
現地の法律事務所や華東政法大学等を訪問しました。

訪問した現地法律事務所には、東京の一等地にマンション（別宅）を持っている弁護士や、アメリカで教育を受け上海に戻ってきた弁護士がいました。

街中が発展に湧いている一方、新たな格差社会を垣間見たような印象を受けました。



外灘からみた浦東地区



浦東地区の東方明珠電視塔の展望台から上海環球金融中心（完成間近）を臨む。

- (5) そして、今回の上海訪問。

週末入りしましたので、前回訪問時も訪れた新天地や外灘、南京路の他、田子坊に、地下鉄を利用して行ってみました。

いずれも、物価は東京よりも高いかもしれない観光スポットですが、中国人（旅行者？）が多く、何を見ても、スマホで写真を撮りまくっていました。

日本語を耳にすることはあまりありませんでした。私自身も、お店等で、一度も、日本語で話しかけられることはなく、道では、中国人に、道を尋ねられるほど。

初めて欧米を旅行した頃には、中国人に間違えられることがありましたが（欧米人にとって、東洋人＝中国人だったのでしょう。）、いつの頃からか、どの外国にいても日本人旅行者が溢れ、日本語で話しかけられることに慣れてしまっていたので、複雑な思いがしました。

訪問する度に、劇的に変化していく上海の街。

そんな中であって、外灘は、イルミネーションでライトアップされているものの、その外観自体は、最初の上海訪問時と変わっていません。

それどころか、旧租界には、戦前から変わっていない建物があるのです。

上海は、アヘン戦争を終結させた南京条約により開港し、租界が形成され、発展した街。

私が最初の訪問でジャズを聴きに行った和平飯店の北楼は、元は、アヘンで財をなしたサッスーン財閥により建てられた建物です。

変わりゆく上海の街で変わらない建物が背負っている厳然たる歴史…。

色々なことを感じさせられる上海の街です。



夜の外灘